

言葉遣いを規定する文化的要素
—「お～ください」・「～てください」論争から考える—

王 鉄 橋

“O～KUDASAI” or “～TEKUDASAI”
-The Cultural Factor Responsible for the Difference-

Wang, Tie-qiao

The expression for “ask for” in Japanese is “O～KUDASAI” or “～TEKUDASAI”. However, the two expressions are used quite differently. Based on a dispute between two scholars of the Japanese language, the present thesis is intended to show the various factors that are responsible for the difference between the two expressions. Besides the factors of meaning and register of the language itself, there are non-language factors and, especially, cultural factors which play a distinct role in making requests and expressions concerning human relationships. But in the teaching of the Japanese language, the study of culture and tradition outside the language is often neglected, which may retard the improvement of the teaching and learning of the language in our country. So it is pointed out in this thesis that more emphasis should be placed on the teaching and study of cultural factors.

1. 問題の提起

1985年には「お手伝い下さい」の正誤について日本の国語学者の間

で論争があった。その経緯は大体つぎのようにまとめられる。

『言語生活』406号（'85.9）には「なぜ実用文法か」を題にした座談会で森田良行氏は「お手伝い下さい」というのが誤用だと主張した文章¹が載っている。この文章を読んだ大石初太郎氏は『言語生活』に「お手伝い下さい」が誤用だというのが納得できない、森田氏の説明を聞きたい²と投書した。それから『言語生活』は大石氏の質問投書と森田氏の回答をあわせて409号（'85.12）の巻末の「読者と編集部」欄に載せた。森田氏の回答には「おほめください」、「わたしのこともご心配ください」とか実際に使われない例をあげて、相手の自主的行為でなければ、相手の意志を無視した恩恵付与要求表現には使われない。「お～ください」が依頼より許容、容認、非抑制の表現であるという結論³を出している。大石氏は森田氏のこの結論にも納得できないところがあるので当国語研究室の11名の先生を対象にアンケートをして、「お手伝い下さい」に対する肯定派は6名、否定派は5名という結果が出た。この結果を書き添えて、「お手伝い下さい」を認めるか否かは語感の個人差によるものだろうと結んで『言語生活』の編集部へ意見を送って、410号（'86.1）の巻末に載せた。そこで、森田氏の回答の結論に対して、「しばらくお待ち下さい」、「来週末までにご都合をお聞かせください」、「お名前には必ず振り仮名をお付けください」などの例をあげて「やはり要求表現（依頼表現）とみるほうが妥当で、相手の自主的な行為ともかならずしも言えない用例があまりに多く行われてはいはしないか」と反論したが、しかしアンケートに意外に半分弱の人が認めないという事実を考えると、「この問題は語感の個人差に大いにかかわるものがある」と結論をつけようということであった。

ところが、412号（'86.3）の巻末に、林大氏の「『お手伝い下さい』に一言⁴」という一文が載った。林氏の文には「手伝う」という動詞をめ

ぐっていろいろな変形をこころみて「お手伝いください」の存在を実際に認めている。ただし、どういう意味にあてはまるかについては「指図」ではないかと指摘した。これに対して、大石初太郎氏は『文教大学国文』（第16号）という学会誌に掲載された「『お手伝いください』考」で「指図とするは外れるように見られるものもあるように思う」、「『お~ください』はおしなべて指図の表現と取りたいと述べたが、これまた同感しがたい⁵⁾と述べた。

以上の論争で取り上げられた問題は筆者も興味深い。しかし、筆者は外国人（中国人）の日本語教師の立場なので日本国語学の大家間の論争に口出しをしたらあたくも尊敬する先生に「お手伝いください」をいうのと同様におかしと思われることになる。したがって本稿では、各氏の文章を読んで中国人の日本語教育者の立場で感想を述べ、標題の表現の使用上の差異およびそれを規定している各要素、特に文化的要素について考えてみたい。

以上各氏の文章を読んで、筆者がずっと抱えてきた疑問は①文法上こんなに簡単な表現形式についてはなぜ日本の国語学者でもなかなかお互いに納得の行く説明がつかないのか、②不自然な文を作ったのはなぜ日本人ではなく外国人の留学生なのかである。

次に上述の二点を手がかりにして「お~ください」と「~てください」を構文的・意味的に分析して、その使用条件に潜んでいる諸要素、特に文化的要素を考えていきたい。

2. 「お~ください」と「~てください」の構文と意味

2-1 構文的分析

標題の二表現の使い方については、ほとんどの教科書では「お~ください」の場合、「動詞の連用形をあてはめて使われる」とか、「~てくだ

さい」の場合、「動詞の連用形（五段活用動詞の音便形）に接続する」とか書いてあって、意味については「請求（依頼）」「命令」と解説されているのであるが、初級の学習者に説明する場合、概念的に混乱を引き起こさないように簡単に紹介するならば、問題にならないが、中級・上級の学習者にはどうしてもその違いと使用条件を付け加えなければ問題となると思われる。森田先生のところの外国人学生は初級の日本語学習者には思えないであろう。

そういった不自然な文を作ったのは、「お～ください」と「～てください」をただ敬意度のちがった依頼表現と簡単に片付けたのが一つの原因である。確かに多くの場合、両者が構造的に置換することが可能である。例えば、

(1) どうぞ、あがってください。 (お～ください○⁶)

(2) お好きなものをお取り下さい。 (~てください○)

(3) 座って下さい。 (お～ください○)

(4) 急いで下さい。 (お～ください○)

(5) この欄に受取人所属部課名をご記入ください。

(~てください○)

(6) その他疑問の点はお近くの郵便局におたずねください。

(~てください○)

(7) ちょっと待ってください。 (お～ください○)

(8) 日向さんにこれをお渡しください。 (~てください○)

(9) (試験採点の責任者が採点を担当している皆さんに対して) すみませんが、お手すきの方は書き取りのほうをお手伝いください。

(~てください○)

(10) どうぞめしあがってください。 (お～ください○)

(11) もしご不要ならぜひ譲ってください。 (お～ください○)

意味的には多少違いが感じられるが、いずれも使われる。しかし、次の例文のような、両者が場合によって置き換えられないものもある。それが興味深いことである。

- (12) a 手伝ってください。 (お〜ください△)
b 助けてください。 (お〜ください△)
c 協力してください。 (ご〜ください○)
- (13) 死にたければ死んでください! (お〜ください×)
(14) 死なないで生きてくださいよ。 (お〜ください×)
(15) 私を殺してください! (お〜ください×)
(16) 福田さんと結婚してください。 (ご〜ください×)
(17) うちの学校の二年三組の女子学生と試合してください。
(ご〜ください×)
- (18) しょげないで、あいつと争ってください。
(お〜ください×)
- (19) 元気を出して、あいつらと戦ってください。
(お〜ください×)
- (20) 社長におっしゃってください。 (お〜ください×)
(21) いつでもいらっしゃってください。 (お〜ください×)
(22) それをもなさってください。 (お〜ください×)
(23) 私をもほめてください。 (お〜ください×)
(24) 少しは私のことも心配してください。 (ご〜ください×)
(25) 先生、私の用例集めを手伝ってください。 (お〜ください×)

上の例を見れば「お(ご)〜ください」のところにはすべて「〜てください」が使えるように見えるが、実際には文型の意味的違いまたは相手・場合による敬語法的制限があって前者は使われても後者は使われない、あるいは使われにくい例もよく見られる。例えば、

- (26) どうぞご自由にお持ちください。 (～てください?)
- (27) 明日の午後、私は家にいますからいつでもおたずねください。
(～てください?)
- (28) (店員がお客様に) お客様のお好きなものをお選び下さい。
(～ください△)
- (29) (女子社員が社長に) いつでもご用がありましたらお呼び下さい。
(～ください△)
- (30) (恩師に書いた礼状に) なにとぞ奥様にもよろしくお伝え下さい。
(～ください?)

こんなに多彩に出た例を見れば、「お～ください」と「～ください」をただ構文的接続法と敬語上の敬意度によってだけ解説する方法ではその相違ないし不自然文の原因を明かすことが相当難しいことが分かる。したがって意味的に分析するうえでさらにその背後に支えている各要素を分析しなければならないと思われる。

2-2 意味的分析

【日本語学】(1990年5月号)に掲載されている前田氏の論文⁷では「お～ください」と「～ください」の両表現の意味的・場面的条件を次表のようにまとめられた。

	誰のため	関係	お～ください	～ください
許可・勧め	相手	—	○	○
依頼(狭義)	自分	—	×	○
命令・指示	自分	↘	○	○
懇願	自分	↗	○	○

表注: 「関係」というのは、話し手と聞き手との間に成り立つべき力関係を表しており、↘と↗は話し手が優位か劣位かということ、—はそのどちらとも限らないことを表している。

森田・大石論争の問題点をよくまとめ、それより一步進めた研究だとも言えよう。しかし、それを細かく吟味して、やはり後味が出て来ないのは無理なことを言えば、文化的（心理的）要素ないし非言語的要素の探求が展開されなかったことがその原因の一つであろう。次に上述の例文に即して両表現の差異を多面的（諸要素）に考察してみよう。

例文（12）においては「手伝う」「助ける」「協力する」という三つの類義語があがっているが、それぞれ「お（ご）〜ください」への適用程度が違うことに注目されたい。そこには意味論的・語用論的に考えれば、意味による語の選択の問題がある。「手伝う」という語はある人の行為を、いつも“主”の立場にいる人またはその人の行為に対して“従”の位置に認識して言う語である。「助ける」は大体的場合「手伝う」のこの意味と重なるが、時には“従”の意味が曖昧になったり、“主”の位置に上ったりすることと、貢献度へのより高い評価を伴う点が異なる。例えば、「命ばかりはお助けください。（手伝う×）」という文は緊迫な状況の下で、もう「手伝う」どころではなく、「救う」ことなので相手の行為を“主”の位置に認めて貢献度への高い評価の語を選んだのである。また、「あのころは王さんにいろいろ助けていただいてありがとうございました。」「いいえ、私なんか、ただお手伝いだけです。」という二文の「助ける」と「手伝う」が入れ換えられないのもそれらの意味的差異によるものである。相手を重々しい位置におくことで敬意を表したい場合は相手の行為を高く評価し“従”であることをあからさまに言わない語のほうが適切である⁹。

（26）（27）例においては（12）例のように語の意味による差異ではなく、文型の意味による差異を示している。「もつ」「訪れる」および「帰る」「連れる」「運ぶ」など複合動詞・移動性動詞に対して「お〜ください」は「〜て来る（行く）」の意味⁹を含んでいるのに対して「〜て

ください」はその意味を持たない。また、文脈から見れば「～てください」より「お～ください」のほうが相手への尊敬度と丁寧さが高いのでお客さんへの親切さを含んでいる差異も感じられる。

例文(13)から(15)はいずれも情緒的に興奮した状態で言い出した言葉であり、「お～ください」は冷静で丁寧な、相手への尊敬表現なのでこんな文に使いにくいわけである。それに対して敬意の軽い命令形「～てください」と、かたい命令形「～てくれ」などがつかえるのは冗談めかしい話しぶりや情緒的に高まる気持という非言語的ムードや雰囲気があったからだと考えられる。(16)(17)に「ご～ください」が使えないのも親しい間柄で軽い気持ちでの進言やふざけた言葉として使われる「～てください」「～てくれ」より敬意度や丁寧さの高い「ご～ください」が語の意味や場面の情緒とマイナス方向に働くことになって押し付けがましい要求表現となるからだと考えられる。また「結婚すること」「試合すること」は動作より事態と定義されるべきである。「ご(お)～ください」は事態になりつつ全過程に重きをおいているのに対して「～てください」などは動作・行為そのものに重きをおいて事態が成立するかどうかに関心が薄いと考えられる。「ご(お)～ください」は二人以上の人による事柄、まして複雑な心理的・人力的過程を経過しなければならないことを意識しながら出した要求である。だから、より一層その押し付けの性質を強調してしまうことになるので不自然となるのである。(18)と(19)も同じような原因があるうえに情緒的な原因もあるように感じられる。(20)から(22)は敬語専用動詞にまた敬意の高い「お～ください」を使うとダブル敬語表現となって不自然と感じられる。

また、(12)から(19)、(23)から(25)に「～てくれ」を使っても可能なようである。それは情緒的に興奮した場合または同等の人の中で

勝手に依頼したり、目下の人に高慢に命令・指示したりする場合なのである。一方、(12) a と (25) 例の「お手伝い下さい」の不自然に対して、(9) 例の自然さを認めざるを得ない。それは願慮語の使用や、後述の心理的・文化的要因による場面の設定によってその要求行為に内在する非丁寧さが大いに緩和され、相手とのバランスが取れたので「お～ください」の使用がふさわしくなるのであろう。このように見れば、言語的表現（語・文型など）非言語的表現（ムード・情緒など）の敬意度や丁寧さは大きな働きをしていると考えられる。

一方、その背後に伝統社会の「尊卑長幼」「上下の序」など道徳的価値観と階層意識などによって支えられている文化的要素も考えられる。例えば、(23) から (25) の条件には「お～ください」が使いにくいという森田氏の意見に大石氏にも異議がないようである。なぜそれが使えないのかと言えば、自分への恩恵賦与を要求したりする時には使われないのであると説明している。結局、「手伝う」と「お～ください」に原因を求めようとしているように感じられる。しかし、筆者はそれが言葉自身の問題だけではないように思う。対象や場面などの条件を置換すれば、たとえば、公的立場で関係する人々に要求を出したり他人への恩恵賦与を要求したりする時になると使用範囲が広がるのである。そこには文化的要素が働いていると見られる。(9) はその一例である。また、(23) (24) の客語にそれぞれ「太郎くん」や「母」など第三人称と置き換えれば「お～ください」への置換可能性が大きくなるのではないかと思われる。電車の中で「座席はお年寄りや身体不自由の方にお譲り下さい」と言う言葉が見られる。だれもそれがおかしい言葉であると思うひとがいない。しかし、「座席は私にお譲り下さい」という言葉が文法的に間違っていないがおかしい言い方であると思われる。

この視点から見れば、そういった表現は言葉そのものが誤用だという

よりその場面・対象または文化的（教養的）要素による誤用だと言えるのではないかと考えられる。

また、自主的ではないといわれる動作動詞、（たとえば、(28) 例の「譲る」、(12) 例の「手伝う」「助ける」など）でも相手に強制しにくい場合 (12) a、(23) から (25) や、相手の好意に依存し依頼してもあまり失礼とならない場合 (11) や、話し手が身分的・場面的に明らかに優位の場合 (9) および緊迫のとき強制せざるを得ない場合とがある。例えば、平和な日常生活や仕事の場合、「私の研究をお助け下さい」と言にくいのが、非常の場合「命ばかりはお助け下さい」と言っても別に不自然とは思われない。なぜなら動作の仕手にとって人道上・義理上になさなければならないことであり、受け手にとって緊迫なので無理でも強く要求しなければならないという心理的条件があるからである。例 (28) から (30) においては話し手と聞き手との社会的人間関係が両文型の使用可能性を大きく左右していることが明らかである。もし話し手と聞き手を反対にすれば両表現形式もかわるであろう。

(31) (お客様が店員に) できれば、もうひとまわり大きな袋に入れて下さい。
(お～ください?)

(32) (社長が女子社員に) 用事があったらブザーを押して呼んでください。
(お～ください?)

(33) (先生が生徒に) どうぞ奥さんにもよろしく [伝えてください]。
(お～ください?)

以上考察した例文と筆者の連想できる範囲から見れば、次の三つの面の要素が考えられよう。

A. 言語的要素

語の意味 文型の意味 願慮を表す語や表現の有無

B. 非言語的要素

声調 ムード 動作 情緒

C. 文化的（心理的）要素

話し手（公的・私的、身分の高低、年齢、性別） 相手（単数・複数、身分の高低、年齢、性別） 人間関係（親疎、内外） 事柄（公的・私的、当事者・仲介者） 場面条件（そばに人がいたかどうか、その人との関係）

言語的・非言語的要素は本文の重点の所在ではなく、また筆者の力の及ばぬ限界を超えているものなので、次項に主に文化的要素について分析しながら考察を進めていきたい。

3. 文化的要素への探求

言語は人類の生活活動に起源する思想の直接的な現実であり¹⁰、文化は人類がある生態環境に適応して生活活動から形成した独特な精神構造（価値体系）と社会構造（人間関係）およびその表現は（言語・芸術など）であると見られる。おおざっぱに言えば言語も文化の一つであるが、正確に言語は文化を表現・反映していると言えればまず問題がないであろう。言語表現における待遇表現は人間と人間の倫理的・心理的相互関係を表現している言葉の特殊な表現形式であるので、実際のコミュニケーションをする場合にそういった文化的要素に制限されていることは言うまでもない。そして待遇表現の「お〜ください」と「〜てください」にも文化的制約があると言えよう。

したがって、日本語の待遇表現である「お〜ください」と「〜てください」を解明するには、日本人の倫理的・心理的人間関係といった文化的要素も考えに入れて考察しなければならないと思う。

日本文化は中国から伝わって来た儒教文化に強く影響されている。儒家思想における価値観・倫理観は日本人の心に深く根を下ろしていると

思われる。古代日本の身分制・階級制・家族を中心とする親疎関係・共同体意識などは儒家思想に価値づけられている。歴史的・社会的原因で日本は中国の儒家思想ほど完全に構築されなかったが、その基本的原理、特に人間関係を秩序づける倫理道徳が日本の武士道と結び付いて、広く庶民まで普及されたのである¹¹。言語表現におけるその反映として敬語表現ないし待遇表現の発達が見られる。「お～ください」と「～てください」は待遇表現の形式として言語生活において人間関係をよく表せるばかりでなく、人間関係およびそれに関する価値観・倫理観に制限されていることも見落としてはならない。儒家思想からきた価値観・倫理観（身分の尊卑上下、「孝・悌」による長幼領属・親疎先後）がその使用上の差異を規定する要素として重要な役割を果している。それは森田・大石論争でそれぞれ示された例によく現れている。つぎに両氏の例文を手がかりに検討してみたい。

森田氏の示した例は

（外国人学生が指導的立場の先生に対して）先生！私の用例集め、お手伝い下さい。

である。この文に対してはほとんどの人がおかしいと感じる。この文をおかしいと感ずる原因は語の意味が情況とずれたものであること、文型の意味が甘ったれの機能をもつ命令形「～てよね」「～てください」でなく、語の意味とあわせてマイナス効果を働かす丁寧な命令形であること、相手への顧慮を表す言葉および畏まりや熱意などの感情表明が欠けていることがあげられる。つまり上述の言語的要素（語の意味・文型の意味・顧慮語の有無）に依拠して片付けてしまったのである。しかし、それだけでは大石氏の示した例を説明することができなくなるのである。

大石氏の例¹²を場面説明も含めて引用すれば次のとおりである。

例えば、入試採点のとき、記述式解答の採点と書き取りの採点とを、

数名ずつのグループで同じ部屋で行う。記述式のほうが早くすんで、書き取りのほうがまだたいぶ残っている。そのとき、当日の責任者である私が次のように言う。「すみませんが、お手隙の方は書き取りのほうをお手伝い下さい」

この文に対しては大石氏のアンケートによれば90%のひとがおかしくないと答えているそうである。それを説明するには、いずれにしても上述の各要素（言語的・非言語的・文化的要素）からそれぞれの適切度を分析して総合的に判断するうえで解きほぐして行かなければならない。

まず話し手のほうを見ていけば、その立場はこの用例に示したように公的なもの（採点の責任者）であり、身分は、筆者の知っているところでは大学の元教育学部長・国語学科長・国語研究室の教授であり、年齢は研究室で最高齢者である。

立場から見れば中国に起源する儒家思想の価値観（官僚優位）によって公的立場が相手の人数またはグループの規模の大小にかかわらず、話し手の位置を高めることになる。それは組織や権力を背景にすることが発言者を優位な地位に置き、一般の人に命令、指示するのに相応の力を立場上持たせたからである。一方、みんなの「私」を含む「公」の目的を遂行するために、換言すれば、話し手と聞き手を含むみんなの利益のために、この場合、曖昧・婉曲な表現よりも明確で幾らか強制的な指示や命令や表明を使うべきだということは話し手と聞き手が両方とも了解しているのである。よく見られたように、公務員・デパートの従業員・客車の乗務員・郵便局の職員などが基本的に利用者やお客に丁寧に接することが要請されるが、時に相手が望まない行為を命令、指示したりする。例えば「ただ今休憩中です。1時以降にまたおたずねください。」「必ず期日までに料金をお納めください。」「会場には自家用車・二輪車の乗り入れができません。都営バスと水上バスをご利用ください。」「カー

ド及び通帳の再発行には相当日数がかかりますので、ご了承ください。」
〔(検問で) 免許証を出しなさい。〕等がその例である¹³⁾。

また、身分から見れば、話し手が当日の責任者だけでなく学部長・学科長・権威的な教授なので、目上と目下、上尊下卑の価値観に支えられ、ストレートな命令や我がままな言い方を使ってもそれほどおかしく思われなくなったのであろう。

年齢にも同様なことが考えられる。家父長制家族集団の精神構造となる儒教思想は「孝」「悌」という倫理秩序にもとづいて長幼の別の厳然としているのである。研究室では最高齢者の教授は相手より強い立場なので、ストレートな要求表現を使ってもそれほど抵抗が感じられないわけである。

つぎに相手のほうを見ると、相手は複数であり同じ研究室の同僚であることがわかる。相手は一人の場合、たとえ話し手の立場が公的であってもその人の条件(年齢・性別)やその人との関係(親疎・内外)の要素が強く働いてくるので親愛か丁重、軽侮か尊大が現れやすい。この例の場合「日向さん、暇そうにしないで、書き取りのほうにまわってよ。」と言うほうが自然で効果的であることもあれば、またある人には頼み事をしないとということで丁重さを表明することもある。それは話し手が相手との関係によって変化するのである。ところが、相手が複数になると、そうした個人個人への顧慮よりもその集まりの目的の実現のほうに重点が置かれ、待遇表現も個人個人よりその場にある、平等化された人の集まりを待遇するように変化する¹³⁾。しかも相手となるその集まりが各国の首脳たちの集まりでもなく遠方からの貴賓でもない同じ研究室の同僚なので、ましてほとんど話し手より年下なので共通の目的を実現するために簡潔な指示・命令の表現を使用することは可能となってくるのである。

それから「公的立場」と関連しているが話し手が仲介者か当事者かということである。発言者は当時採点作業の責任者であって両グループの作業の進行を調整する役をしているものであり、目的達成において当事者の各グループも了解している責任を負っている。だから話し手は仲介者でもあれば、権威的責任者でもある。仲介者としては直接性を薄め、当事者の諸々の感情や配慮に干渉されずに情報の伝達に力を注ぐことが可能となる。権威は話し手としての待遇的位置を高め、加えて仲介者の役割と相俟って聞き手が望まないことを命令・指示するのに相応の力を持たせ、「お手伝い下さい」などの言い切りの命令形を抵抗なしに受容させることになるのである。その場合過度な敬謙は「権威」を低め、仲介の役割を減じ、その場の目的をかえって損なうのでふさわしくないものとなる¹⁴。

また、この例の場面条件にはその場に間接な聞き手（書き取りのグループ）の存在がある。仲介者としての話し手はどちらかの代弁者ではないので直接の相手（記述式のグループ）に発話しているときでも当事者のもう一方を当然意識して顧慮しているわけである。直接の聞き手への言語表現が敬謙しすぎると、書き取りのほうを低めることになったり仲介者・責任者としての位置が崩れることになる。書き取りグループへの顧慮がすぎ、例えば「手伝ってくれ」「手伝って下さい」を言うと、書き取りグループの代弁者のように感じられたりすることになる。その場面の三者間で各々の立場と数多くの要素に制限されている心理にはバランスが取れて言語表現として落ち着いて行くのであろう。

ここで森田氏の例文に戻って考えてみると、その文の話し手が学生で当事者であり聞き手が指導教授の先生である。両者の関係も先生と学生（まして外国人学生）の関係なので親しい間柄とは言えない。事柄としては学生自分の研究用例採集なので私的である。その場にだれかがいる

かどうかは不明であるので考慮にいれないことにする。ただ上の情況だけを大石氏の用例分析に出た要素と比べれば、日本人の言語生活を規定している価値観や人間関係などの規範に合わないことが分かる。そうした倫理規範に合わない言語表現もその不自然さを感じさせられた原因の一つであるとみるべきだと思われる。

このように考えてみると、「お～ください」と「～てください」の両表現使用上の差異はただ文法的または構文論的な説明によってすまされることではない。数多くの要素（当面文化的要素は日本語学界に無視されやすい）のそれぞれについての吟味、要素間のバランス、そして、諸要素の累積の結果として総合的に考察していくうえでその適合度を判断することこそが科学的であると言えよう。

最後に森田氏の例文の話し手が外国人留学生であることを考えると、ここで外国人向けの日本語教育に提言しておきたい。日本の文化、日本人の心が分からない通訳や翻訳者は中日両国の政治、経済、文化の本格的な、または「以心伝心」な交流の使命を負うことができないのである。近年来、中日間の政治・経済上の葛藤、および「乾杯」だけの「文化交流」を見て、日本語教育の内容改革の必要性を痛感したのである。

注

1. 『言語生活』406号（1985.9）に「なぜ実用文法か」を題にした座談会における森田良行氏の発言（6ページ）による。
2. 大石初太郎「『お手伝いください』について」『言語生活』409号（1985.12）93ページによる。
3. 森田良行「大石先生へ」『言語生活』409号（1985.12）94ページによる。
4. 林 大「『お手伝い下さい』に一言」『言語生活』412号（1986.3）90ページを参照。

5. 大石初太郎「『お手伝いください』考」『文教大学国文』16号(1987.3)12ページによる。
6. ○×記号は各々、例に使用することが可、不可であることを表す(なお、△、?、×の順に不自然さの度合いが高い)。また、本稿の2-1にあげた例は日本で大学や教育機関に勤めている教職員の三十数名の方を対象にしたアンケートをまとめたものによる。
7. 前田広幸「『〜てください』と『お〜ください』」『日本語学』第9巻、第5号(1990.5)47ページによる。
8. 高崎みどり「待遇表現の“語感”を決定する諸要素について」『文教大学国文』17号(1988.3)3ページによる。
9. 前田広幸 前掲論文 43ページによる。
10. 陳 原『社会言語学』(学林出版社 1983.8)の第三章の第三節を参照。
11. 王 鉄橋「日中敬語表現と儒教文化」『言語と文化』第3号文教大学 言語文化研究所(1990.4)による。
12. 大石初太郎「再び『お手伝い下さい』について」『言語生活』410号(1986.1)より。
13. 前田広幸前掲論文、46ページを参照。若干の例文を使用した。
14. 高崎みどり前掲論文、6ページによる。